



四季の情景の中には少年時代からおじいちゃんになるまでの矢部さんが

煮を作った食べていたというのはいや、かなり驚きです。矢部えー!? 僕にとって八国山はつくしの名産地ですよ。市長(笑)。子どものころは自然の中でたくましく育ったのです。矢部逆に中学では読書に夢中にな

た。市民のかたから寄贈された本が、全て100円均一で売られていて、僕はかなり本を購入しました。市長中学生のころはどういう作品が好きでしたか。矢部漫画だとやはり手塚先生の作品や本だと純文学の作品から太宰治先生や夏目漱石先生や筒井康隆先生の作品を読んでいた。市長お笑いの世界に入り、大家さんの家に住む前は、賃借している家をテレビのロケで激しく使い契約の更新を断られ、大家さんの家の2階に住み始めたとき聞きました。最初に大家さんと会ったときはどのような印象でしたか。矢部一言目に「きげんよう」とあいさつされて、すごく衝撃でした。戦前にタイムスリップしたような感覚でした。大家さんは2階の住人とは仲よくしたいと思っていました。僕は仕事が忙しくなく、大家さんのお誘いをほとんど

受けることができたので、親しくさせてもらいました。市長大家さんも太宰先生や芥川先生の小説がお好きとのこと、文学少年だった矢部さんと話が合ったのではないですか。矢部女学生のころから読書が好きなたったので、話はよく合いました。大家さんは芥川賞の受賞作や話題作をよく読んでいました。僕の単行本が出た時も、大家さんから「本屋で買ってきてほしい本があります。」とお使いを頼まれて、僕は「僕の漫画を買ってくれるのかな。」と思って「何の本ですか。」とニヤニヤしながら聞いた。市長聞いたら? 矢部ノーベル文学賞を受賞されたカズオイシグロ先生の本でした(笑)。市長(笑)。勝手ながら矢部さんのイメージとして、同世代の同性異性よりも大家さんくらしいの年ごろのかたの方が

市長大家さんとの交流を漫画で描こうとしたきっかけは何でしたか。矢部大家さんと喫茶店でお茶をしていたら知り合いの漫画原作者の先生と偶然会い、大家さんを紹介したら「都会の孤独な青年と孤独な老人の温かい交流を見た。これは作品化した方がいいよ。」と勧められました。今までのエピソードを絵に描いたら、先生から「絵は下手だけど味があっていいね。」と言ってもらい、そこからとんとん拍子に先生に出版社との段取りなどもしていただき、実現しました。市長漫画の作品化にあたって、話の構成の仕方としてほんわかする感じや、大家さんの孤独さや矢部さんの孤独さが伝わってきて、その2人が交流しつつ、かみ合っているように最後にオチもあって、そこがおもしろいと思いませんか。矢部さんにとって漫画の構成を思いついたときは、「漫画の神様が降りてきた」という感じですか。矢部大家さんと実際にあったことを思い出して僕なりに描いています。例えば漫画のテンポも大家さんと話すときはゆっくりのテンポだから、それをそのまま再現しました。市長連載のスケジュールは忙

しいのですか。矢部最初の連載は月刊だったので月に4ページで楽でしたが、その後週刊新潮に移籍し急に忙しくなりました。市長大家さんに作品を見せたり感想をもらったりなどはありましたか。矢部自身の登場について喜んでいただけ、「私の髪型、こんなに大きくない。」とダメ出しをされました(笑)。あと大家さんが「漫画だと『のらくろ』や『フクちゃん』が好き。」と言っていました。描く以上は大家さんに読んでもらうことが大前提だったので、作風も古風な感じにし、コマ割りも簡単にしています。市長最初の読者は大家さんという設定で描かれていたので、おもしろいと思いませんか。矢部さん、だからすごく優しさが伝わるような漫画だと思いませんか。矢部大家さんに直接言えないことも描いています。あの意味ラブレターのようなものですね。ですから大家さんには「大家さんと僕」の単行本を差し上げることができて、また受賞の報告もできて本当に良かったです。大家さんとは僕が入居してからいろいろと交流させてもらい、その後僕が成長して独り立ちできたところも見せられたと感じています。市長そもそもこの漫画はいつもの出会いという偶然が重なって生まれた作品だとお聞きして、人と人の出会いの不思議さはすごいと思いました。

大家さんとの出会いが全ての始まり

市長深い言葉ですね。今言ったことが作品に反映されるとより一層すばらしい作品になると思っています。矢部大家さんとの話はもう一冊単行本で発行するつもりなので、絶対に描き上げたいと思っています。

市長このたびは手塚治虫文化賞の受賞、誠にありがとうございます。私も「大家さんと僕」を読みましたが受賞しただけあって本当におもしろくていい作品だと思います。矢部さん(以下、矢部)ありがとうございます。光栄です。僕もこの賞のほかの受賞作品を結構読んでいて、尊敬し、影響を受けた作品ばかりです。しかも僕は手塚治虫先生のファンクラブに入っていました。僕にとつて手塚先生は神様なので、やはり受賞は本当に嬉しいですね。

市長八国山で採ったつくしで佃煮を作ったというのはいや、かなり驚きです。矢部えー!? 僕にとって八国山はつくしの名産地ですよ。市長(笑)。子どものころは自然の中でたくましく育ったのです。矢部逆に中学では読書に夢中にな

た。市民のかたから寄贈された本が、全て100円均一で売られていて、僕はかなり本を購入しました。市長中学生のころはどういう作品が好きでしたか。矢部漫画だとやはり手塚先生の作品や本だと純文学の作品から太宰治先生や夏目漱石先生や筒井康隆先生の作品を読んでいた。市長お笑いの世界に入り、大家さんの家に住む前は、賃借している家をテレビのロケで激しく使い契約の更新を断られ、大家さんの家の2階に住み始めたとき聞きました。最初に大家さんと会ったときはどのような印象でしたか。矢部一言目に「きげんよう」とあいさつされて、すごく衝撃でした。戦前にタイムスリップしたような感覚でした。大家さんは2階の住人とは仲よくしたいと思っていました。僕は仕事が忙しくなく、大家さんのお誘いをほとんど

受けることができたので、親しくさせてもらいました。市長大家さんも太宰先生や芥川先生の小説がお好きとのこと、文学少年だった矢部さんと話が合ったのではないですか。矢部女学生のころから読書が好きなたったので、話はよく合いました。大家さんは芥川賞の受賞作や話題作をよく読んでいました。僕の単行本が出た時も、大家さんから「本屋で買ってきてほしい本があります。」とお使いを頼まれて、僕は「僕の漫画を買ってくれるのかな。」と思って「何の本ですか。」とニヤニヤしながら聞いた。市長聞いたら? 矢部ノーベル文学賞を受賞されたカズオイシグロ先生の本でした(笑)。市長(笑)。勝手ながら矢部さんのイメージとして、同世代の同性異性よりも大家さんくらしいの年ごろのかたの方が



東村山の直売所にいつか「八国山産のつくし」が並ぶかも…!?

# 「大家さんと僕」制作秘話



市長大家さんとの交流を漫画で描こうとしたきっかけは何でしたか。矢部大家さんと喫茶店でお茶をしていたら知り合いの漫画原作者の先生と偶然会い、大家さんを紹介したら「都会の孤独な青年と孤独な老人の温かい交流を見た。これは作品化した方がいいよ。」と勧められました。今までのエピソードを絵に描いたら、先生から「絵は下手だけど味があっていいね。」と言ってもらい、そこからとんとん拍子に先生に出版社との段取りなどもしていただき、実現しました。市長漫画の作品化にあたって、話の構成の仕方としてほんわかする感じや、大家さんの孤独さや矢部さんの孤独さが伝わってきて、その2人が交流しつつ、かみ合っているように最後にオチもあって、そこがおもしろいと思いませんか。矢部さん、だからすごく優しさが伝わるような漫画だと思いませんか。矢部大家さんに直接言えないことも描いています。あの意味ラブレターのようなものですね。ですから大家さんには「大家さんと僕」の単行本を差し上げることができて、また受賞の報告もできて本当に良かったです。大家さんとは僕が入居してからいろいろと交流させてもらい、その後僕が成長して独り立ちできたところも見せられたと感じています。市長そもそもこの漫画はいつもの出会いという偶然が重なって生まれた作品だとお聞きして、人と人の出会いの不思議さはすごいと思いました。